

パンジー・メディアの挑戦

大阪府・社会福祉法人創思苑

パンジー・メディア統括 林 淑美
映像ディレクター 小川道幸

知的障害者からの発信

「きぼうのつばさ」とは

知的障害のある人が自分たちの思いを発信するインターネット放送局「パンジー・メディア」が毎月1回放送している番組「きぼうのつばさ」は、この3月で19回目になります。

放送時間はおよそ50分。その時々の社会の動きを知的障害者の視点で考える「パンジーの眼」。料理を作るのも食べに来る人も知的障害のある人たちの「パンジーキッチン」。日々の生活を楽しんで欲しいという期待を込めています。「私の歴史」は、知的障害のある人が人生を

振り返り、楽しかったことやつらかったこと、今の自分の思いや夢を語ります。

特集枠として、知的障害者の日常を追うドキュメントや彼らの発想で作ったドラマなど盛りだくさんの企画が詰め込まれています。それら4つの企画が2人のキャスターによって展開されます。

知的障害のある人の役割

パンジー・メディアでは、知的障害のある人たちが様々な役割を持っています。2人の知的障害者がプロデューサーを務め、番組の内容が知的障害のある人たちの立場に立っているか、わかりやすい内容になっているなどをチェックします。また、3人の知的障害のある人が撮影や音声を担当しています。キャスターをはじめ出演者も、ほとんどが知的障害のある人です。これまで出演者は50人を超みました。

なぜ、始めたのか

パンジー・メディアの母体である社会福祉法人創思苑は、知的障害のある人たちが「どんなに障害が重くても地域で普通に暮らす」ことを目指し、多くの当事者



スタジオでのリハーサル

はグループホームに暮らしています。その彼らの思いを知ってもらうにはどうしたらいいのかが、開設以来のテーマでした。

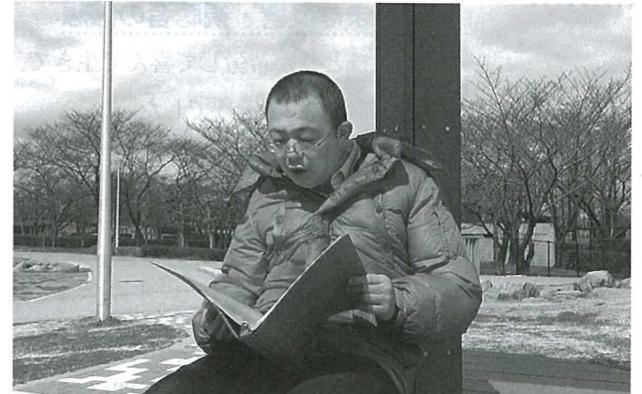
1995年、アメリカで開かれたピープルファースト大会に参加した時、知的障害のある人が堂々と講演をしているのを目撃して衝撃を受けました。そして、2001年に訪れたスウェーデンでは、知的障害者がラジオを通して情報発信していました。それ以来、いつかは自分たちも発信したいと思い続けてきました。

あれから15年。映像ディレクターの小川さんとの出会いがありました。その時から、念願の活動が始まったのです。

2年間を振り返って

準備期間も含め、この2年間を振り返ると、当初は思ってもいなかった驚きや発見がありました。まず、パンジー・メディアに参加した当事者が元気になったことです。当事者も職員も映像に関しては全くの素人。初めての経験にあわてふためいたり、失敗したりの連続でした。何度も撮り直してやっとOKになることもあります。その中で、知的障害のあるたちはいつも元気でした。カメラ操作がうまくできなかったり、セリフが言えなかったりしても何度もチャレンジし、決して辞めるとは言いませんでした。「自分がいないと番組ができなくなる」、「自分は必要とされている」、これまで障害者は役に立たないと言われてきた彼らが、自分の存在を肯定的に捉えるきっかけになったかもしれません。回を追うごとに、当事者は積極的になっていきました。

また、自分の過去を話すことに大きな意味があることに気づきました。最初の頃、「私の歴史」に出演したい人は、そっ

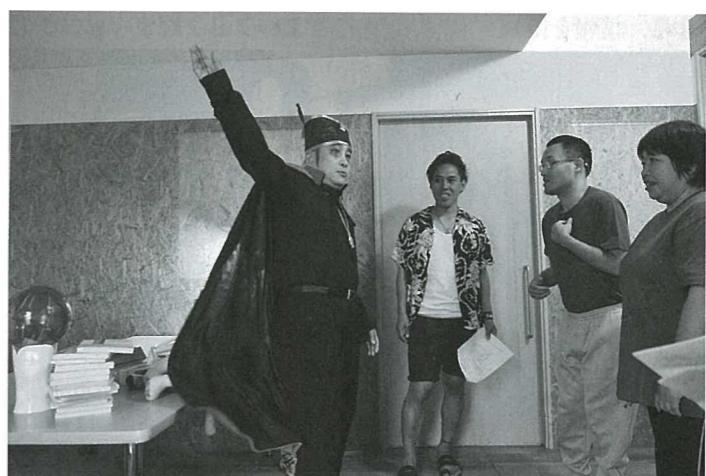


わたしの歴史 「わいには大切な人がいる」

と伝えに来っていました。Aさんもその一人です。そして、職員と一緒に始めた原稿づくり。Aさんは戸惑いながら過去の苦しかったことや、どうしていいかわからなかったことなど、これまで自分の中に閉じ込めていた思いを語ってくれました。台本が完成し、初めてカメラの前で自分の人生を語った後の晴れ晴れとした笑顔が印象的でした。

ところが完成試写会の日、Aさんは席に座ったものの顔をあげません。試写が終わり、大きい拍手が起き、仲間から「大変だったなあ」と声をかけられた時、初めて顔を上げたAさんに笑顔がありました。その後、積極的に歴史を話したいと、希望者が増えました。

番組を見た当事者も「私も同じだ。一人ではなかったのだ」と気がつき、明るくなっていました。



入所施設が舞台のドラマ制作

さまざまな反響・視聴者の感想

「一人ひとりが苦労して喜んで生きて、そんな姿に涙が出そうでした。」

「当たり前に地域で暮らす。自分の息子はどうだろうかと自問自答の毎日でしたが、放送は私の背中を押してくれました。」

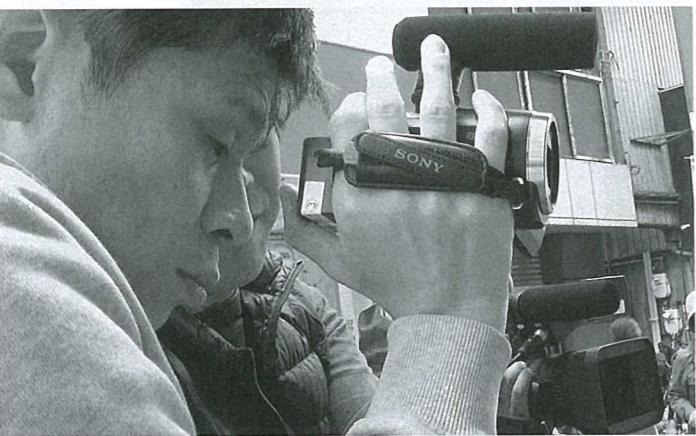
「当事者の皆さんの中の内をていねいになぞり、一人ひとりが心を開いていく様子が自然に受け止められました。」

「自分を受け入れる人生を始めることの大切さをあらためて感じました。」

パンジーメディアの今後に向けて

私たちは「もっと知的障害のある人のことを知ってほしい。そして、どんなに障害が重くても、地域で普通に暮らせる社会になってほしい」と強く願っています。そのために、パンジーメディアの活動を全国に広めたいと思っています。その第一歩として、北海道の知的障害のある人が記者として活動を始めました。いつか、パンジーメディアの支局が全国に展開できる日を目指しています。その活動が、津久井やまゆり園のような事件や知的障害のある人たちへの虐待がなくなることにつながると信じています。

(林 淑美)



目の見えない人がカメラマンに挑戦

社会と知的障害者をつなぐ

知的障害者との出会い

知的障害のある人に初めて身近に接したのは、2015（平成27）年7月でした。あるきっかけで偶然「パンジー」を訪れた時です。そこでは100人程の知的障害者が日中活動をしていました。その時、彼らと何を話し、どのように接したのか、記憶は飛んでいます。それほど衝撃的でした。覚えているのは、まるで辺境地に迷い込んだような気分です。これまで撮影でアマゾンやアフリカなど多くの辺境地を訪れた時と似ていました。

そして、10月からパンジーの当事者の生活に焦点を当てたドキュメンタリー映画の制作が始まりました。その様子を見ていた当事者の中から「僕たちも映像をやってみたい」と話しかけられました。それをきっかけに、私も経験したことのない挑戦が始まったのです。

ゼロからのスタート

これまで、自分たちの思いや考えを社会に発信する機会がほとんど無かった知的障害者が、映像を使って発信する。日本で初めての試みでした。

最初に取り組んだのはカメラの操作から。スイッチやモニターはどこにあるのか、映像のサイズや向きはどうするのか。参加したほとんどの人がビデオカメラを持つも撮影するのも初めてでした。本当に番組が作れるのか。不安なスタートでした。

5ヶ月間、撮影や自分の思いを表現するなどのワークショップを重ね、当事者発案のドラマのショートムービーを作りました。どの作品も自由でユニークな發

想に驚きました。

ワークショップを始めて7ヵ月後の、一昨年9月に第1回放送を立ち上げました。それ以来一度も穴を開けることなく、今年の3月には19回目の放送を迎えました。

発見と驚きの連続

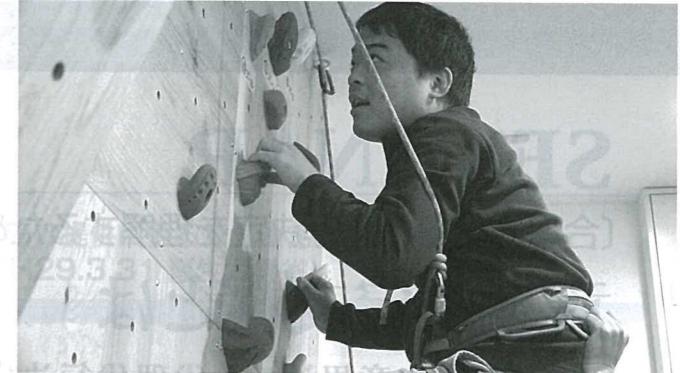
番組制作の過程で、当初は予想もしなかった様々な発見や驚きがありました。「私の歴史」に出演したことがきっかけで、それまで自分の意見を言えなかった当事者が、自分の思いをみんなに伝え始めました。また、撮影スタッフとして、カメラや音声を担当した当事者が、どんどん積極的になってきました。ドラえもんのぬいぐるみが無いと話せなかった人が、撮影現場ではドラえもんを手放し、少しづつ話し始めたのです。

何が彼らを変えたのだろうか

完成試写で映像を見ている当事者の反応に接して、「映像の中に、これまでと違った自分を発見」しているのではないかと思いました。差別や偏見の体験から自分を否定的に見ていた当事者が、映像を通して外から自分を見ることで、自分を肯定し始めたように感じました。また、製作スタッフに加わった当事者は、「自分には役割がある」と自らの存在に自信を持ち始めたかもしれません。チャンスさえあれば、様々な可能性が広がっていることを教えられました。

差別や偏見を超えて

2016（平成28）年7月、神奈川県の入所施設で起きた悲惨な事件。犯人は「知的障害者は必要ない」と信じていました。また、マスコミも当事者の声を伝えることはほとんどありませんでした。知的障害者の思いや考えが社会に伝わら



スタジオでは、スポーツクライミングも！

ない。そして彼らのありのままの姿が見えない。それが差別や偏見を生んでいる原因の一つではないかと感じました。

この2年半、知的障害者と一緒に映像を作ってきて、最初に感じた「辺境地」の戸惑いは、今は消えてしまいました。それまで仕事をしてきたテレビ界の価値観を持ち込んでも、番組を作ることはできません。制作に参加したスタッフ、そして出演者のありのままの姿、その存在を受け入れた時から、それまで見

えなかった知的障害者の様々な姿の意味が、少しづつわかるようになってきたのです。

私が起きたことが、社会でも起きたら。その思いは、番組の企画を考えるときに強く意識するようになりました。パンジーメディアが、社会と知的障害者の間を繋ぐことができたら……。知的障害者と映像制作の活動を行う中で、ますますその思いを強くしています。

（小川道幸）

お問い合わせ

パンジーメディア

〒578-0911 大阪府東大阪市中新開2-10-16

TEL072-968-1615

<http://pansymedia.com/>

（4ページのカラーページも併せてご覧ください）